

## 「ヘルマンとドロテア」の問題點

前 田 利 道

### まえがき

昨一九五三年秋、小樽商科大學學友會が「平和な生活のために」というスローガンのもとにその「大學祭」を催した際に、筆者は大學祭の一環として行われた小樽市公會堂における講演を學友會から依頼されたのであるが、それには、平和の問題あるいはドイツ文學に關することについて、という注文がついていた。それまであまり關心をもっていなかった「ヘルマンとドロテア」の一篇が筆者の腦裏によみがえってきたのは、そのようなことで學友會幹部の學生諸君と話合っていた際であつた。かつてドイツ文學の愛好者であつたという學生幹部の一人は、例の「ヴィマル傳説」の見事な信奉者であるようにみえた。かれはヴィマル文化とその「平和」とにかきりない愛惜の念を表明していたのである。筆者はこのことを偶然とは考へなかつた。その根柢には、ドイツ本國における數世代を経て非歴史的に歪曲され、さらに日本的にゆがめられてきたヴィマル文化の理解があり、眞のゲーテ像の隠蔽があつたのである。

ゲーテほどの巨大な文化財となると、これを讀むものも讀まないものも、直接あるいは間接に、さまざまな影響を受けていることはたしかである。そして、ドイツ本國を除いて、日本においてほどゲーテが尊重されてきた國はすくないのではないかと思われる。しかし、ゲーテとは何ぞや、ゲーテのいかなる點が偉大なのか、ゲーテの諸作品は現代の日本の讀者にとってどんな意義があるのか、という問にたいしては、必ずしもすべての人が即座に答へることはできないだらうし、答へ得てもそれは千差萬別の色合をもつたものとなるだらう。われわれの先進たちは過去數十年にわたつて

「ヘルマンとドロテア」の問題點

ゲーテを紹介し、その「偉大さ」を指摘してくれた。しかもなおゲーテはじゅうぶんわれわれに明らかにになったとはいえないのである。ゲーテはいかかわらず模糊たるものにつつまれておのおの頭のなかに宿っているのである。しかし、この事實は重大である。多かれ少かれ日本人の頭のなかに宿り得たゲーテ、日本人が愛することのできたゲーテであるならば、われわれの前進のための一つの基盤はそこにもありうるであろう。——そういう観点からみると、たんに過去の文化花咲いた一時期としてヴィマル時代を、過去の偉人の一人としてゲーテを理解し追慕するというだけでは不十分なことは、さきあげた學生の一例をもつても明らかだと思ふ。すなわち、ゲーテについて語るばあいにも、たんにゲーテ一個人についてのわれわれの理解を深めるといふことだけに眼目があるのではなくて、こんにちのわれわれの在り方について、われわれはいかなる方向へ前進すべきかについての解明に資することを期しなければならぬ。そして、ドイツという國の特殊な歴史的發展が、日本という國のそれにいちじるしい類似を示し、ドイツの事情がわれわれの鏡となることができるようなばあいがあるならば、ゲーテとその時代との歴史的研究もいっそう重要性を増してくるのである。——

學生諸君と語りあいながら、筆者はこのような感想をいだいた。そして内外からの促してはからずも右の講演をひきうけることになったのであるが、この稿はその際にまとめた（「平和な生活——ゲーテの『ヘルマンとドロテア』に關連して——」と題する）草稿に、訂正と補足を加えたもので、成立の事情から説明的部分の多くなつたことはやむを得なかつた。しかし歴史的被制約性の見地からの「ヘルマンとドロテア」の考察は、（F・エンゲルスの貴重な指摘とそれについての再指摘とを除いて）あまりみあたらないように思うので、ぶ雑ながらこの小論がいくらかでもそれに寄與することができれば、望外の幸せだと考えている。（一九五四年十一月）。

—

ゲーテの偉大さなどということとは、すでに言い古されたことであり、かれの個々の作品についてもわれわれは、意識的にせよ無意識的にせよ、その不朽の價値を疑わないまでになつてゐる。十八世紀の後半から十九世紀の前半にか

けて生きて活動したゲーテは、生前から現代に至るまで、つねにかれを賞讃し、その諸作品に眞剣にとり組む人々を絶やさなかつた。そればかりではない、ドイツ國においては、その時々政治的支配者たちも、第二帝政時代、ヴァイマル憲法時代、ナチス時代を通じ、現在では東西の兩ドイツにおいて共に、ゲーテをドイツの偉大な文化財として尊重してきたし、また現に尊重しているのである。

しかしながら、たとえばナチス政權とナチス・イデオロクたちが祭りあげることのできたゲーテと、またたとえば東ドイツ政府とそのイデオロギーが尊重するゲーテと、——これらはともに同一のゲーテなのであるか。この二つの思想體系についてすこしでも理解のあるひとは、その同一であることの可能性について疑いをもつにちがいない。そしてじじつそこには、いかなる点でゲーテが偉大なのであるか、またかれの作品のおおの、どこに現在のわれわれにとつて不朽の價值が宿つているのかという判断に關して相違があるばかりではないのであつて、その根柢には本來のゲーテ像そのものにはなほだしい相違が生じてきているのである。

ゲーテ像の變形は、かれの本來あるべき姿がさまざまな色合でぬりかくされることによつて、歴史的に生みだされてきたものであるが、それは二重の根據をもつて複雑に展開した。第一の根據はゲーテ自體の複雑さである。かれの同時代者フォン・シュタインがゲーテを、「通り過ぎるものすべてが映る萬華鏡」にたとえたことがあつたが、稀にみる抱擁性と積極性とを兼ねそなえてその時代ととりくんだゲーテには、イギリスの産業革命からフランス革命を経てアメリカ初期の興隆に至る世界の經濟的・政治的發展が反映している。またしたがつてゲーテは、これに對應するイギリスの諸思潮からフランスの啓蒙思想、さらにはドイツで独自の展開を示したスピノザ主義やドイツ觀念論に至るまでの全思想的發展を、また當代の自然諸科學の發展を情熱的に把握している。そればかりではない、過去にそれぞれ輝かしい時期をもつたギリシャ、イタリー、オランダなどの思想・精神をすべて吸収しているのである。そのか

たわらにおいてはまた、後進國としてのドイツの分裂した「縮刷版的絶對主義諸國家」(G・ルカーチ、「ドイツ文學小史」、道家・小場瀨譯)とそのイデオロギー——かれのそれになりたいするたたかいかかわらず——をも反映したのである。かれはこれらと積極的にとりくむことによつてみずからの思想を形成し、そのことによつてかれの時代を精神的に前進せしめたのである。そして、藝術論において、また自然科学的思考において、先進國フランスやイギリスの人々をしのいで先頭を切る瞬間や方向をもつたのである。

しかしながら、これら一切は、ゲーテにあつては、フランス的に明白な、イギリス風に實證的な表現をうる事ができなかつた。それはもちろん、後に述べるゲーテの認識の仕方にも主として關係があるのだが、そういう認識の仕方や表現方法をとつたことについては、まず第一にかれの生きていたドイツという國の國情、政治や文化の遅れに原因を求めなくてはならない。かれが天才的に把握し得た世界的規模における偉大な思想的内容と、かれが現實に身のまわりに見出したドイツというみじめな國との間には、はなはだしい間隙があつたのである。文學作品においてはそれが第一には取材の範圍にあらわれてくる。ゲーテはその主要作品のテーマには世界史における重要で偉大な情勢を天才的にとらえている。しかし當時のドイツにはそのような情勢はまったくみられないか、あるいはまだ弱々しい萌芽状態でしかなかつた。作品に生かすべき生きた偉大な素材は當時のドイツには稀であつたに違いないことが察せられる。たとえば「ヴェールター」はかれ自身の環境とのたたかい——かれ自身のながした血を直接の素材として書かなければならなかつた。そのほかでは、多かれ少かれフランス革命に關係をもつ諸作品を除くと——そしてフランス革命という大きな情勢をドイツというみじめな國へ直接にもち込んだ作品がほとんどゲーテの失敗作となつたことは特徴的だが——それを別にして考えれば、すぐれた作品の多くが、主として過去の偉大な時期、動亂の時代に材料がとられている。また、そうでないばあいには、ドイツの將來の發展を豫感的に先取する作品となつた。「ゲッツ」

「エグモント」などは過去の動亂の時代から素材を得たものであり、ドイツの市民的知識階級の典型とみられるファウストは、ルネサンスの時代に生れ市民社会の發展を豫感しつつ死ぬのであるが、その背景には長い期間にわたる情勢の展開がみられるのである。そしてまた、「遍歴時代」は（ドイツ的・ゲーテ的に）ドイツ將來の發展を空想の上で設定した作品とみることが出来る。自分の體驗しなかつたことは一行も書かなかつたと斷言したゲーテであるから、これらすべての素材にもかかわらず、それらの作品はみなかれの體驗の所産であるといふことはできよう。しかしそれが多くのばあい間接的な素材によつて表現されているということは注目すべき点である。眼前に在るドイツやそこに生きて活動している人物を直接に描くことが比較的になくなつたことには意味がある。（そして、このことは「ヘルマンとドロテア」を理解するうえに忘れてはならない。フランス革命に關係をもつこの作品は、ゲーテの眼前にある當代のドイツを舞臺にしているからである。）

天才的思想家と環境との矛盾は、また、思想の形態と創作方法とにあらわれる。たとえば成熟したフランスの市民階級とそのイデオロクたちは、明白な唯物論の旗印をうちたてて、既成の政治・社会制度と正面からたたかうことができた。その同じ時代にドイツでは、市民階級と呼稱せられるものはまだ力ある存在とはなつていなかつたのである。そこではせいぜい市民的身分が意識されていたにすぎない。具體的な政治的・社会的な方面でのこれら市民の活動は、まだ日程に上らなかつたといつてよい。したがつて、たたいは思想のなかへ追いやられる。世界的な發展に激發された先驅的・市民的イデオロクとその支持者たちは、一方においては、現實における政治的社会的地位の確立へのたたいから、觀念のなかでの自我の確立へ——觀念論哲学へとかりたてられたのであり、それはそれなりに、ヘーゲル哲学に到達して、觀念のなかではイギリスやフランスに先んじて、世界的發展の先頭に立つていた。他方、あくまで自然を重んじた一派は唯物論的方向をたどらざるを得なかつたが、ゲーテはその一人として、レッシングや

ヘルダーと共に、スピノザの「神の衣をきた」唯物論を根據として既成の世界觀とたたかつたのであるが、やはりこの哲學をもつてしては、政治や社会制度を直接の相手とすることはできなかつた。だがこの方向は、スピノザ主義に歴史的發展的見地を加えることによつて、フランス啓蒙主義の唯物論が本來の哲學的形態においては、あくまで形而上学的であつたのに比して、ヘーゲルとは反對の方向から、すなわちあくまで自然に至上權を置く方向から、辯證法的思惟の豫感的把握に到達することができたのである。しかし、主として自然や文學素材を思惟の對象としたゲーテのスピノザ主義は、ついに哲學的に意識的な唯物論に到達することはできず、汎神論的・敬虔的な殘滓、形而上学的な遅れを除去し得なかつた。かれの「對象的思惟」——自然科学、藝術、そのほか一切を通じている思惟方法としてゲーテはみずからそう名づけたのだが——は、それゆゑ、それらの最もすぐれた諸方向と、形而上学的・汎神論的殘滓との混合物であつた。

(I) ドイツの市民階級にとっては、フランスやイギリスやアメリカでのような發達成熟は、ずっと後にいたるまでも不可能であつた。それは現在のドイツ市民氣質にまで名殘を止めるかげとなつてゐる。左にこの点に關するG・ルカーチの文章を引用して置きたい。これは、引用した部分やその後を合せて、最も見事な分析あるいは指摘の一つだと思ふ。そして、ついでながら言及して置きたいのは、この分析のわれわれ日本人につきささってくる痛烈さである。これはもう人ごとではない。市民革命の徹底的に行われなかつたところでは、これほどにも相似た卑怯さや、その裏返しの傲慢さが生れてくるのだろうか。世界文學の研究は、この点でも、いやこのような点においてこそ、われわれに最も深い教訓を與えるのだと思ふ。なお引用文は、菊森英夫譯「ゲーテ研究」(青木書店)によつた。傍点は筆者。「フランス(およびイギリス)においては、市民的文化は次第しだいに貴族——その最も革命的分子にたいしてさえも——にたいする影響力を増大した結果、まもなくどの貴族も一介のへんくつな變人と化してしまひ、この發展のワクの外の存在にとどまるようになった。それに反し、ドイツでは——わけでも、後のドイツ帝國のありかたを規定する役目を果たしたプロイセンでは——ユンカー・イデオロギーが市民的知識階級の決定的な諸層にその刻印を押している。

最も外面的な生活諸習慣から、世界觀にいたるまで、いたるところに、市民的知識階級がこのようにエンカー・イデオロギーに同化しているのが認められるのである。「この過程は新しいドイツの人精神状態V全体を解明するものだが、もちろん今ここでそれを分析している余裕はない。ただ二三の主要な点にだけ、讀者諸君の注意を向けたいと思う。たとえば、市民的勇氣が欠けていたこととである。これはすでにビスマルクがドイツ人の國民性だと確言したものであり、疑いもなく宮廷貴族や官僚貴族の一特徴なのである。責任ある自主的決意を恐れる氣持だとか、その反面下に向けられた(上に向つてはおし、かくしている)情け容赦のない、非人間的な殘虐性だとかは、いずれもこの市民的勇氣の欠如と切つても切りはなせぬつながりをもっている。政治の領域における、ドイツ市民階級の無能力はしばしば確認されてきたところだが、これも同様にこのようなドイツ社會の發展に歸着させらるべきものである。ドイツの市民は人秩序Vを欲する。だが、彼らがつくりだす秩序というやつは、つねにだれかに、またなにもかに奉仕する秩序なのである。卑屈、阿諛、肩書狂は、ますますドイツ市民階級の特質となった。こうした根性こそ、市民的な自覺がほとんど完全に欠けていることのあらわれにほかならないのだ。」

この「最大のドイツ人」とドイツのみじめさとの間の矛盾は、最も根本的なものとして、ゲーテの當時の社會にたいする態度にあらわれる。「ゲッツ」や「ヴェールター」において表現された當時の社會にたいする直接的な反抗と批判、ヴィマル宮廷における改革者的活動は、イタリーへの逃避を境として、自然の内部へ、かれの觀念のなかへ、間接的・文學的な諸表現へととじ込められる。そして外界への失望とそれとの妥協とは、かれの内部世界にも多くのかけを落さずにはいかなかったのである。

はなはだ概括的ながら右にみてきたように、ゲーテという人物を形成した時代そのものが、市民革命の端初から先進諸國におけるその達成までの、波瀾に富んだ全過程を含んでいて、ゲーテは普遍的、積極的、肉體的な態度でそれにとりくんだのであり、またかれの祖國の特殊な状態がそれに加わつて、これらが交互作用をなしてかれの思想や作品を生んだのであるから、それらがすこぶる複雑で難解な印象を與え、またじじつ難解であることが知られる。加う

るに、ゲーテは自己のいだいているなんらかの觀念を作品に表現しようとした作家ではなく、あくまで客觀的に素材に即して、素材そのものの運動と發展を表現しようと努めたりアリズムの作家であるから、その作品の理解にはいつその準備が要る。たとえば六十年もの長年月テーマを抱きつづけた「ファウスト」のばあいのように、かれの「對象的思惟」は、テーマそのものの運動・發展を見極めようとする努力に弛むことをしらない。それはかれが自然に對する態度とひとしいのである。したがって、ゲーテの作品に躁急になにかまとまった觀念を求めようしたり、また反對に、見るものの觀念を當てはめてこれを解釋したりすると大きな誤を生ずる。ゲーテを理解しようとする人は、また自身の能力や態度によつて、さまざまなゲーテ像の生じうる根據はますそのようなところに伏在しているのである。

歴史的にゲーテ像の變形させられてきた第二の根據は、ゲーテの死後においてドイツ國にも、また世界的にも、經濟的・政治的な大きな變動があり、それに應じてさまざまな思想體系が生れてきたことである。ゲーテの生前や死の直後には、比較的客觀的にかれの作品や言行を觀察し、ゲーテそのものに基いての研究やその發表が行われ、ゲーテ理解をたすけてきたのであるが、さきにも述べたように、第二帝政時代、ヴィマル憲法時代、ナチス時代といったはげしい政治形態の變動があり、それにつれて觀念や思想の形態も、相たたかいつつ變轉をくりかえしてきた。その間にあつて、ゲーテ研究者も、純粹に客觀的な態度を保つことができず、意識的にせよ無意識的にせよ、おのおののイデオロギーに好都合なゲーテをつくりあげようになつた。ゲーテの原典の客觀的研究よりも、おのおのの一面に、特に非歴史的に、ゲーテをとらえてこれを誇張し、それに基いて自己の思想や觀念を述べる傾向が顯著となつた。その結果、ゲーテは、あるいは「生の哲學者」に、あるいは「眞の人間」に、あるいは「『我』の思想の傳道者」に、あるいは「時代を超越した天才」に、あるいは「ゲーテ的存在一般」に、さらには、これらのあらゆるゲーテ歪曲を

根據として、ナチス的精神の始祖のひとりにもなればならなかった。それらの人々が抽象的で「博識」な表現や、神秘的で敬虔な一種の説得力をもって飾りたてたので、天才ゲーテはますます難解複雑な偶像となつていたのである。そういうわけだから、ゲーテは、たとえば「詩作に對する深い造詣をもつ現代ドイツの専門文学者エルンスト・ペルトラムにとつてさえ、いわば『遠く青霞む精靈の山なみ』であり、また、純藝術の創作に依つて現代のドイツ文学に高い独自の地位を占める作家ハンス・カロツサにとつてさえ、『日本人のひとりひとり』が、己が郷國の象徴とする、かの傳説の響にめぐりまわられている火山富士』の如き存在<sup>(1)</sup>になつてしまつていたのである。

(1) 「傳説より眞實へ」井上正藏、「理論」第四卷、第三號、一九五〇年三月。

さて、多かれ少かれ、おのおのの主觀に映じたいわば「賢人」ゲーテを絶對化して尊崇するということでは、なんのうるところもないし、なんらの前進をも見出せないということは明らかだし、また、じつさいにそういう態度からはなにも生じてこなかつたといつてよいのである。そればかりではない、ナチスがかれを始祖にかついだとしても、日本の大学教授が戦時中にかれを「思想善導」の守本尊に仕立てたとしても、それにたいしてほどこすすべはなかつたのである。

しかし、一般にドイツ古典文学史の歪曲と「傳説」形成にたいしては、すでにF・メーリングの「レッシング傳説」以來、幾多の研究と指摘とがあり、<sup>(1)</sup>また、メーリングに先んじて、F・エンゲルスのゲーテ論においては、客觀的・科学的に歴史の流れのなかに、ゲーテを(その偉大さの傍らにある矮小さともども)捉えることの最初の基礎が置かれ、この方向の研究もその後小さからぬ進展を示しつつある。<sup>(2)</sup>こうして、一般には世界史のなかで、特殊には文

学や哲学や自然科学の歴史のなかでゲーテの占める位置と役割とが明確になり、それが一般的承認をうけたとき、はじめてゲーテはわれわれのものとなり、われわれの前進の力づよい足場の一つとなりうるであろう。

(1) メーリンググについて古典文學史の歪曲を具体的に指摘したものととして、パウエル・ライマンの「ドイツ文學史における傳説形成と歴史歪曲」(岡田光雄譯がある)は貴重な内容を含んでいると思う。それは、多かれ少かれ觀念論に依據する研究が、「自由」とか「客觀的」とかの見せかけの上に、どのような作品をもち上げ、どのような作品を埋滅してきたか、また、どのような数々のすぐれた作家をうずもれさせてきたかを例證している。そこに挙げられた多くの作家の作品は、こんにちわれわれは容易に手にとってみることをできない。しかも、ヘルダーとかゲーテとかに深い影響をおよぼしたのである。

(2) 科學的な研究は未だ端初の時期にあると云ってよく、その容易でないことは、そのような志向をもつドイツやソビエトなどの研究者たちが、ある決定的な判断を下すに際して、その全面的な研究を後日に、あるいは後の世代にゆだね、みずからの研究の一面性や不十分さを附言するのを忘れないことをもって知られる。そしてゲーテの作品はバイマル版全集で百四十數卷あり、その書簡だけでも一萬三千通を數えるのだということを讀者に意識せしめるのである。

## 二

「ヘルマンとドロテア」はゲーテの「成功した」作品の一つということができよう。というのは、それは長い年月に亘つて「ヴェールター」以上の讀者を得てきており、「ファウスト」第一部と並んで最も普及した作品だからである。一七九七年に刊行されると、たちまちに反響をよび、多くの讀者を得たばかりでなく、間もなくドイツ國外にも廣まり、イギリス、デンマーク、イタリーなどでも相次いで翻譯された。その當時からこんにちまでどれほどの異った版が刊行され、どれだけの外國語譯が出たか數えきれないほどである。わが日本においても十數種の翻譯が出版されてきており、戦後だけでも數種の異った譯が出ているのは、ここにあらためていうまでもなく周知のことであ

る。

そういうわけで、「ヘルマンとドロテア」の批評史も、おおむねその讚美の歴史といふことができる。すでにゲーテの同時代者ヴィルヘルム・シュレーゲルやヴィルヘルム・フォン・フンボルトによつて、名高い古典的な論評が行われているが、それを皮切りとして、以後かすかすの賞讃が跡を絶たなかつたのである。いま、叙事詩というその形式に關する歴史的考證や論究はしばらくおくとして、その内容に關してそれらの論潮をたどるならば、まず、シュレーゲルは、この作品においては、倫理性が美しい敘述の要素をなし、熱情は倫理的根據から派生しているといひ、さらに、人間の本性にある品位および偉大さは公平に把握され、思慮ある克己の明晰さは貴い濫い心と内面的に結合してあらわれ、同一權利を主張しているという。そしてその結論は、それが大きな様式の完成された藝術作品であり、同時に祖國的、國民的なもので、智および道德の金科玉條にみちた書であるということであつた。フンボルトは「ヘルマンとドロテア」をホメーロスの英雄叙事詩に對比される市民叙事詩の典型とみなし、この作品では古典の感覺と新時代の進歩的な文化とが内面的に統一され、現實の關係における全個性のなかに、人間の存在の主形式が純粹に眞實にとりあげられており、一つの中心点から出ていくようにみえる、それは經驗に富んだ人生の成熟から生じ、自己の眼をもつてみているものである、と稱揚したのである。ゲーテの文学上の無二の伴侶となつたシラーは、この作品が出版されるや熱狂してこれを迎え、ハインリヒ・マイヤー宛の手紙のなかでは、それをゲーテの作品および當代文学の最高峯であると斷言した。後代の評價もおおむね同様の態度をとり、たとえばビルショウスキーは、その「ゲーテ評傳」のなかで、これを「民族詩」としての條件を満たした健全な文学であると認め、ブランデスはその「ゲーテ論」で「ヘルマンとドロテア」においては家庭と祖國とが讚美され、一切は上品に手堅い手法で描かれてゐるけれども、いじけた平板なところはまつたくない、目立たない日常のテーマが大きな高尚なスタイルでとりあつ

かわれている、と結論を下している。また、ゲーテを「それ自身において完成した、時代を超越した天才」に祭り上げたことで名高いグンドルフ教授も、ドイツ人が、「ヘルマンとドロテア」を市民生活の讃歌であると解することに喜んで同意したのである。

これに反して、じゅうらいのドイツ古典文学史に批判の眼を向け、これを根本から書き改めようと志した人々の「ヘルマンとドロテア」にたいする論調には、またおのずから異つた態度がみられる。この陣營にあつては、一九三二年に「デイ・リンクスクルヴェ」誌の「ゲーテ特別號」ではじめて公表され、それ以後のゲーテ研究に決定的な影響を興えたエンゲルス（およびマルクス）のゲーテ論（一八四七年）をまず擧ぐべきだろう。このなかでは「ヘルマンとドロテア」は、臆病な、こりこうな小都会人や、サンキュロット派の軍隊と戦争の残念さにたいする迷信的恐怖のために逃げだしてゆく農民やを描いた作品であると斷ぜられ、それによつてゲーテは、おしせまつてくる歴史的運動にたいしてドイツ社会を辯護したのであつて、當時のドイツの「みじめな」社会にたいするこのようなゲーテの態度は、ゲッツ、プロメートイス、ファウストなどによつてそれに反逆し、それを嘲笑した最高の文学者、「もつとも偉大なドイツ人」の一つの俗物的な側面を示すものであると指摘されたのである。このような観点は、他の場所におけるマルクスやエンゲルスの藝術に關するすべての發言を含めて、多くの人々によつて支持されてきたのであつたが、もちろんこの方向の研究にしても今後解決されなければならない幾多の問題を残している。たとえば、すでに述べた「レッシング傳説」の著者で、またエンゲルスの遺稿集の編集者でもあつたF・メーリングが、右の（かれがマルクスの筆だと信じていた）エンゲルスの論文を承知の上で、そのみかそれから引用をしながら、ゲーテに關するそれとまつたく反對の観点に立つた論文を書いたことは、すでに數次に亘つて批判されてきたのではあるが、そのこと自體は、いろいろの意味で重要な示唆を興えている。ここでは「ヘルマンとドロテア」の問題に限定

せねばならないが、かれはその「美学的散歩」のなかではこれを「ヴェールター」と共にゲーテの名聲を飾る最も輝かしい眞珠の一つであると賞讃し、その「ドイツ史」のなかではこれをすばらしいエポスとよんだのである。またたとえばG・ルカーチは、ドイツ文学史に關する前にあげた著書のなかで、「ヘルマンとドロテア」については、當然強調すべきだと思われる右のエンゲルスの観点をほかし、ゲーテやシラーのジャンルの區分に關する問題提起は、文学形式の上から、（一方においては、）「古代形式の創造的な再生の助けをかりて、現代のブルジョア時代の社会的・内容的の問題性を克服することを問題」としたのであるが、「ヘルマンとドロテア」はこれを證明している、といい、また、ゲーテやシラーはけつして民衆に無縁な題材を取りあつかわなかつたが、この傾向はゲーテにいつそうよく現われている、かれの民衆的な婦人像の系列は青春時代に始まり、古典主義時代にも繼續している、といつて、グレートヒェン（「ファウスト」）、クレールヒェン（「エグモント」）、フィリーネ（「ヴィルヘルム・マイスター」）とならべて、ドロテアを擧げているのである。（かれは「ファウスト研究」でも同様に主張する。）そして、もちろん、そこにはわれわれの考察すべき重要な問題提起を含んでいるとは思ふが、ルカーチの諸著作にみられるドイツ古典主義時代やゲーテの民衆性やにたいする過大ともおもわれる評價と對比してみると、この記述にあらわれた観點とエンゲルスの見解とがそのまま調和するものかどうかは、じゅうぶんの研究を要することと思われる。ルカーチの見解には、むしろ「ヘルマンとドロテア」にかんする新しい形の讚美をみなければならぬからである。

### 三

ゲーテは一七九六年十二月五日の、J・H・マイヤー宛の手紙のなかで、この敘事詩の進行状態を報告し、それにつけ加えて、「わたしはこの敘事詩というつばのなかで、小さい町の生活のかすを取除いて、純粹に人間的なもの

を摘出しようと試みた。同時に、世界という舞台の大きな動きと變化とを小さい鏡のなかから反射させようと企てた。」といった。この言葉は、ゲーテの意圖を語ると同時に、この作品に含まれた問題の所在を示していると考えられる。

「小さい町の生活のかすを取除いて、純粹に人間的なものを摘出する」ということは、ゲーテの創作方法の根柢に關係する言葉である。シラーの表現をかりると、「ゲーテは純潔で誠實な心をもつて經驗をもとめ、類型すなわち典型の性格をもつた個物を創造する」態度をとつた作家であるからである。このゲーテの意圖はいちおうは實現されたかにみえる。たとえばフンボルトは、「諸人物は、自然と生々した現在の生活とのみが示しうるとおりに、眞實であり个性的であるが、同時に、現實が決して示し得ぬほど純粹であり理想的である。」と評しており、ブランドスは、「これは『ゲッツ』以後ゲーテがはじめて書いた祖國を歌つた詩で、『ゲッツ』とは比較にならぬほどの完璧の域に達し、しかも眞實である。それはドイツの男性と女性とのタイプを理想化している。」といつてゐるからである。

もちろんそれは、われわれがこの敘事詩を一讀すればいつそう明らかなことである。ヘルマンもドロテアも、その姿も心ばえも、この上もなく氣高く美しくみえる。それゆえ、さきに觸れたシュレーゲルの評言のように、そこでは倫理性が美しい敘述の要素をなし、熱情も倫理的根據から派生してゐるといふことができるし、人間の本性にある品位および偉大さは公平に把握され、思慮ある克己の明晰さは貴い濫い心と内面的に結合されてあらわれ、同一權利を主張している、ということも可能だろう。そればかりではない、ゲーテの麗筆はヘルマンやドロテアの姿を簡潔に優美に描きだして、われわれにあだかもギリシヤ彫刻をみるような思いをさせ、諸人物は、自然と生々した現在の生活とのみが示しうるとおりに、眞實であり个性的であるというフンボルトの評言も、これを諸わざるを得ないかのごとくである。しかし、この点に關しては、ビルシヨウスキーの言葉がわれわれを立ち止らせるに足りるのである。

かれは、「ヘルマンとドロテアは、その感情にも思想にも、職業や素性や住居などに拘束されない高度の精神をもつ人間の類型である。」といい、「ゲーテが題材のために巧みに選んだ小市民的『農民生活のために最も美しい人物を犠牲に供しようか、それともこの人物のために小市民的生活の輪廓を少し曲げようか、この二つの中いずれかを選ぶに當つて、ゲーテは迷わなかつた。かれは堪能な畫家として二三の色彩を加えてこの歪曲を隠そうとし、それで満足していた。』といつている。ここでかれは、この作品を辯護しながらも、その主要人物の理想化、抽象化を「歪曲」として鋭く指摘したのである。

(1) この言葉は後にもしばしば引用するので、すこし長いが、本文に採った諸部分の前後を含めて、渡邊格司譯「ゲーテ評傳」に依據しつつ、左に記載しておく。「かれがこの個性化のばあいには自然主義的な過度を避けたことによつて、個々の人々に普遍妥當な性格を與えたのである。牧師、亭主、女將はそれらの階級の類型であり、藥屋は獨身者の類型である。さらにわたしたちが父親たちの結婚に當つても、亭主の背後にはこういうような人が少數ながらおり、女將の背後には相當いると假定するならば、この夫婦は父親と母親との類型であり、最後に藥屋の外にも類型的な小市民が描かれている。外的な特徴によつて判然と限定された階級の代表者であるという意味において類型でないのはヘルマンとドロテアである。ヘルマンのなかに類型的な裕福な農家の息子——宿屋の息子としてなく農家の息子として描かれている——を認め、ドロテアのなかに立派な家庭の躰をうけた農家の娘を認めるものはないであらうから。假面によつて農家の娘とみなす人があつたならば、舞台上のかの女の科白を考えてみれば、すぐに自分の誤謬に氣がついてあらう。ヘルマンとドロテアはその感情にも思想にも職業や素性や住居などに拘束されない高度の精神をもつ人間の類型である。かような——どの時代にも稀ではあるが、どの時代にも存在する——人間をゲーテはその詩のなかに導き入れて、幾百年の後世にも首肯せしめる。……かれが題材のために巧みに選んだ小市民的『農民生活のために最も美しい人物を犠牲に供しようか、それともこの人物のために小市民的生活の輪廓を少し曲げようか、この二つの中いずれかを選ぶに當つてゲーテは迷わなかつた。かれは堪能なる畫家として二三の色彩を加えてこの歪曲を隠そうとし、それで満足していた。外的の眞實そのままは何よりも優れているとはゲーテは考へなかつた。』

さて、ゲーテの「純粹に人間的なものを摘出しようと試みた」という表現と、そのような意圖からかれが現實に描き出した諸人物とは、かれの創作方法といかなる關連にあるのか。このばあい、この敘事詩にあらわれる副人物に關しては問題がないであろう。副人物はいわば背景なのであり、生々とした個性をもつ類型であれば十分だし、ビルシヨウスキーのいうとおり、ゲーテはその個性化と同時に個々の人々に普遍妥當な性格を與え得たといえるからである。すなわち、ヘルマンの父親は満足した富裕な宿屋の亭主として、穀物畠や果樹園の所有者として、小市民の父親として、まことに過不足なく、類型でありながらしかも生きた個性として描かれている。かれは、適度に信仰をもち、かんしゃくもちで短氣だが、人情にもろく善人なのである。働きものの母親は、頭もよく、てきばきとして、しみこむようにひとの胸の内を察することもできる。宿の女將として、農家の主婦として、またヘルマンの母親として、生きていくようにわれわれを納得させる。この町の誇りで、青年ながら老成しており、人の世を心得、聞く人のぞみをわきまえている牧師も類型なら、おしゃべりでやや下品な藥種屋も申し分のない商人・小市民の代表である、個人主義者・現實主義者である。かれは、戰亂からの避難民の運命をみても、なによりもまず、じぶんの財産と運命との急迫を懸念するのである。

しかし、問題なのは主人公たち、ヘルマンとドロテアとの描き方である。ふたたびビルシヨウスキーの言葉を想い出すならば、「外的な特徴によつて判然と限定された階級の代表者であるという意味において類型でないのはヘルマンとドロテアである」からである。ヘルマンは宿屋の息子としてよりも、むしろ富裕な農家の息子としてその環境が説明されている。だがわれわれは、かれを農村青年のひとりとして認めることはできないのである。なるほど農作物や家畜などにたいするかれの關心も示されてはあるが、その形姿や心情や行動の描寫やは、階級を超越して理想化されている。周圍の諸人物が小市民的に活々としているに反して、水と油のように調和していない。ドロテアの

ほうは、まず最初に、ごろつき兵士の一隊の暴力から同行の少女たちの危急を救ったけなげな娘として紹介される。それも、やにわに一人の兵士の腰から剣を引き抜いて、力一杯斬りつけると、その兵士は血煙をたてて娘の足もとにどつと倒れる、——それから娘は雄々しくも斬りまくっていった、というのである。すらりと背が高いその容姿も、愛嬌のあるその顔だちも、その姿からだちにその健かな心根が察せられるほどである。生れつき丈夫だが、強いばかりでなく氣立もやさしい。さきに婚約した男が死んだ際にも、心靜かに苦痛に堪えた。その婚約の男というのも氣高い若者で、高い思想の炎とともに、貴い自由をめざしてパリへ、革命の第一線へ飛びこんで行ったが、國にいた時と同様、専横や陰謀を攻撃したため、間もなく無残な最後をとげたというほどの青年である。ドロテアは次のような響の高い言葉でかれを描寫する。そして「氣高い人」とかれをよぶのである。

そのことでしたら、思い出にちよつとの間を捧げさして下さいまし。この指輪を片身に殘して行つたまま故郷に歸つて參らなかつたあの善い方は、思い出される値打はあるのでございますから。あの方は自由を愛する心と、改められた新制度の中で活動しようという一念にかられて、パリに參ります時、豫め身の行く末を見通しておりました。果してそこで獄屋につながれ一命を捨てました。別れの折にあの方は申しました。「……何もかも動いて、形を具えた世界が混沌と闇に逆戻りし、新しい形を作ろうとでもしているようだ。お前がわたしに對し變らぬ心を持ち続け、いつかまた世界の崩れ跡の上で再会することがあつたら、わたしたちは生れ變つた人間で、造り直されており、自由に、運命に左右されなくなつてゐるのだ。このような時世を生きぬけた者を縛るものがあるうとも思えぬからだ。……」<sup>(1)</sup>

(1) 「ヘルマンとドロテア」からの引用はすべて改造社版「ゲーテ全集」の譯に依據した。

そしてドロテアはまた、骨身おしませず働く娘であり、避難民の間でも、特に子供達や病苦の人達に心から慕われている女性でもある。ヘルマンへの愛情にしても率直で純真である。——しかし、これら申し分のないドロテアの映像には、氣高い、美しい、活動的な女性であるという印象のみが強く、かの女がもっているはずの小市民的・農民的な舉止はきわめて消極的にしかあらわされていない<sup>(1)</sup>。そして「その假面によつて農家の娘とみなそうとする人も、舞臺上のかの女の科目を考えてみれば、すぐ自分の誤謬に氣がつく」のである。

(1) ゲーテがこの敘事詩を書くに當つて素材にしたにちがいないといわれるG・G・ゲッキングという人の「ザルツブルク大司教管區より追放されたる……ルツテル教徒の移住完話」という報道のなかの挿話は、ほとんど細部に至るまでこのゲーテの敘事詩に採用されているのだが、その挿話のなかに、ドロテアに當る女性が次のように語る(傍點の)箇所が採用されていないのは注目すべきである。「おとめ、エッティンゲンを過ぎりしおり、アルトミュールなる富める市民のむすこ、おとめのもとに來りて問いけらく、おんみこの國をいかに見るや? 答えていわく、いとよき國と見はべる。かれつつけて言う、おんみ、わが父のもとに仕えんと欲せざるや? おとめ答えていう、かしこまりぬ。もし父君われをやといたまわば、心を盡して仕えまつらむ。さておとめはおのが心に得たる農業のいとなみをことごとくかれに語りぬ。家畜をやしない、牝牛を搾り、畑をたがやし、干草を作るわざ、そのほかくさぐさの事わざを知る由をかれに告げぬ。」(譯文は岩波文庫版、「ヘルマンとドロテア」解説に依據。)

ここでわれわれは、ゲーテがみずから主張する創作方法から明らかに逸脱していることを知るのである。このばあい、ビルシヨウスキーのように、「このような——どの時代にも稀ではあるが、どの時代にも存在する——人間をゲーテはその詩のなかに導き入れて、幾百年の後世にも首肯せしめる、」というようなほめ言葉をもつて報いても、ゲーテの偉大さになにも加えることはできないのであつて、かえつてこれによつてかれの卓越した方面をぼかしてしまう結果になり、眞のゲーテを歪曲してしまうのである。ゲーテの創作方法に根本的なものは、かれの「對象的思

「<sup>(1)</sup> 惟」あるいは「對象的詩作」という言葉で表現されている客觀的な、對象を矛盾と連關と發展とにおいてみるというかぎりにおいて辯證法的な態度である。主觀の恣意をあくまで却け、客觀そのものとその運動とを重んずるリズムである。それは「事象の真相にたいする洞察力」をもつて對象に肉迫することである。それはまた、「一般的なものゝを顧慮しまたは指示することなしに、ある特殊を言いあらわす」創作方法であり、「この特殊を生き生きと攔むものにしてはじめて、それとともに一般的なものゝ——それをそれと氣づかずに——保持する」ことになるのである。したがってかれは、ある特殊をある一定の情勢において生き生きと攔むためには、想像以上の研鑽をつくしたのである。また、大きな主題になると、「四十年でも五十年でも心中に保持」していたのであり、またたとえばフランス革命のような世界的に大きな情勢にあつては、長年の間、「世界中で恐怖その極に達したこの事件の顛末を、なんとかして詩の上で克服しようという涯知れぬ努力」もしたのである。ゲーテの偉大な創作はこのような態度の徹底から生れている。かくして、ファウストにせよ、ゲッツ、エグモンにせよ、ヴェールターにせよ、その他ゲーテの創り出したあらゆるすぐれた人物は、その所屬する階級を代表する典型であると同時に、特殊な「この人」であり得たのである。

(1) この語、およびそれに續くゲーテからの引用は、論文「生彩ある一言の著しい勵まし」および「散文箴言」による。

ヘルマンやドロテアの形姿には、理想像とでもいふべき美しさが與えてあり、かれらの性情には、これを概括するならば、「孝」とか「勇」とか「忠」とか「愛」とか「克己」とかいつた種々な徳性が賦與されている。一見「人間」としてのかれらは申し分のない人々であるようにみえる。ブランドスと共に、そこにドイツ青年男女の理想化を

認めて満足してもよさそうである。——しかし、自然を反映するすぐれた藝術作品であるためには、一般に（そしてゲーテの精神においても）、その主要人物の典型化に當つて、「あらゆる認識のばあいとひとしく、眞偽が（相對的眞偽であるが）問題となる」<sup>(1)</sup>のであつて、なるほど典型化とは一種の理想化にほかならないかも知れないが、それはあくまで藝術的な眞を失つてはならないのである。そして藝術的眞偽ということとは、その根柢に自然的（外部的）必然性と内部的必然性・本質の問題をもつているのであるが、このばあい内部的必然性・本質が決して傷けることを許さない根本的なものであり、外部的必然性はそれに從屬するものであるということとは事實であろう。したがつて、對象の屬性・本質がそれに固有なものであり、作家の主觀から獨立した客觀的なものであることを承認する作家でも、その本質を傷けないかぎり、いな、その本質をとり出して強調するためにも、ある程度外部的必然性を犠牲にするとはありうるのである。しかしそれは、あくまで本質をいつそう明確にうきぼりにできるばあにかぎるのであつて、これを隠蔽しぼかしてしまふ役割を果すようなときには、それは對象の眞を蔽う誤つた手段といふべきである。そしていかなるばあいにも、細部を眞實に描くということは文学作品として根本的なことである。

(1) 「藝術認識論」北條元一（昭和二十三年、北隆館）三〇七頁。この著には多くの示唆をうけた。

(2) 同上、三五二頁參照。

ヘルマンやドロテアのばあいにも、その内部的必然性・社会的本質をいつそう明らかにすべき手段としてならば、その外面のある程度の歪曲（このばあいには理想化）も許されるであろうが、そうでないときには、かれらが當代のライン河畔に、小さな町でもあり農村でもあるというその地方に、現實に生きているものとしていつそう自然に

描かれねばならぬのであり、その小市民・農民としての外部的な眞實はできるかぎり捨象されてはならないのである。

しからば、この敘事詩のなかで行われている主人公たちの理想化は、かれらの本質・社会的必然性を強調しているだろうか。いな、である。後にみるように、かれらは本質的には小市民・農民として描かれているのであり、その外面の理想化は、かえってそれを隠蔽する手段となつてゐるからである。しかもなお、事實はそれにとどまつていない。ヘルマンとドロテアにたいするゲーテの描寫には、かれの主張する方法と正反對のもの、觀念的な方法への轉落さへみることが出来る。そこには、ゲーテが「一般的なものゝ顧慮しまたは指示することなしに、ある特殊を言いあらわす」方法を探らず、「人間」という一般的なものから特殊なものをつくり出そうとする態度がみられるのである。すなわち、かれの「人間」にたいする觀念<sup>1</sup>理想に合致させようとして、美しい形姿や徳性を寄せあつめてつくりあげた人間像をそこに發見するのである。しかりとすれば、それがいかにわれわれに美の映像を與えるにしても、やはり<sup>1</sup>悪しき理想化であり虚偽であるといわなければならぬ。

(1) 前出「藝術認識論」三〇五頁參照。

さて、さきにヘルマンとドロテアの性情に賦與された徳性として、「孝」「忠」「勇」「克己」などを擧げたのであるが、——そしてこれらがこの敘事詩の讚美されてきた大きな根據となつてゐることは、いままでに引用した諸家の評言をみても明らかだと思ふが、——それらを吟味してみると、また異つた面からこの敘事詩を照し出すことができるのである。

……兩親をうやまうことは昔からわたしの一番念じていることですし、自分を生んでくれ、西も東も分らない幼い時に心をこめて教えて下さった兩親より、賢い人偉い人はないと思っていました。……

ヘルマンは幼少からこんにちまで父にたいして孝である。ドロテアとの結婚を申出て父にはげしい叱責をうけても、それに反抗することもなく、裏山へ行つてひとり悲しみに堪えようとする。——またドロテアへの愛のめざめを契機としては、かれの「勇」が示される。かれは、「ゲーテの他の青年主要人物のもつていない愛國心にさえ燃える（ブランテス）」のである。

……それはわたしの魂のことばです。祖國のため生きもし死にもして、他の人々に尊い手本を示そうという勇氣と望みが胸の奥に動いています。ほんとに、ドイツの青年が一致して、國境で敵に屈せぬよう協力したら、この立派な土地を敵に蹂躪させ、わたしたちの眼の前でこの國に實のつたものを食い荒したり、男をこき使ったり、婦女子を奪つたりするようなことはさせません。……

ドロテアの、兵士にむかつて刀をふるう「勇」、いたるところに——子供たちや病人や老人や、最後にはヘルマンや——にたいして示されるかの女の清純な「愛」は全篇をいろどる花花である。またかの女の主従関係や對世間關係における「忠」献身」は數箇所になたつてくりかえし述べられる。それは事える人への奉仕の精神、他人への配慮、女のもつべき役割や節度を強調している。

……女というものは、持ち前に従つて早くから仕えることを習わねばなりません。仕えてこそ始めて、行く行くは治めることが出来、家の中で分相應の権力が得られるようになりも致します。女のきょうだいは早くから男のきょうだいに仕え、両親に仕え、その一生はひと様のために、往つたり來たり、あげたり運んだり、とゝのえたりこしらえたりして過すのでございます。どんな道も辛いとせず、夜も晝も同じように、働くことをついぞ詰らないと思わず、針仕事も面倒がらず、自分というものをすっかり忘れ、ひたすらひと様のために生きるように慣れてこそ、女は仕合せなのでございます。それに母ともなれば、女はいろいろの婦徳を一々具えていねばなりません。……

……娘はどこへ行つてもひとに仕えるものですし、かしずかれて家で樂をしていては、却て氣骨が折れますから、……等々。

「克己」もまたこの敘事詩の中心的な徳目である。ヘルマンもドロテアも（それに父親も含めて）、激情のもち主であるが、それを制するだけの節度と力とをもっている。（そして、これがこの敘事詩を古典的藝術たらしめるものだというのが、じゅうらいの標準的な評言であつた。）

さて、徳目をこのようにならべてゆくと、詩的美化にもかかわらず、それがあんがい平凡なものだということがわかる。それは小市民社会の理想を示していないだろうか。ここにあらわされたものは、よかれあしかれ、積極的に社会をうごかし推進してゆく階級の理想ではない。この世界に一定の満足を見出し、波瀾を避け、節度をもつてこの世を送りたいという小市民、ある程度の生活の安定を得てそれを擁護したいという農民の願望に合致しているのである。さきには、いわば外面から、ヘルマンとドロテアとの形姿や言葉をみてきたのであり、それが「人間」として理

理想化されていて、外面的な眞實を欠くことによつて藝術的眞から遠ざかっていることを知つたのであつたが、いまここに示されたのは、かれらの内面的必然性・本質なのであり、詩的表現によつて誇張され美化されているとはいへ、それが明らかに小市民的・農民的性格をうきぼりにしていることがわかる。この叙事詩が、外面の眞に欠けるところがあつながらも、ある種の調和をもつて印象され、藝術的に眞なるものとして長い間諸家の支持を得てきた理由はこの點にあるのである。ただそこに描かれたものが、ビルショウスキーのいわゆる「どの時代にも稀ではあるが、どの時代にも存在する人間」などではなく、ゲーテの時代にも現在にも生きており、ゲーテ自身の一部をも形成している「小市民」の理想化<sup>(1)</sup>にすぎないだけなのである。

(1) そしてこの理想化が、小市民的要素を内抱している評者や讀者に「美しい人間像」として映り、共感を興えるということに自然である。その露骨な典型的な例は、エンゲルスがその「ゲーテ論」で批判したカール・グリュンであった。グリュンの頭にはゲーテの世界市民としてのあらゆる偉大な方面は入ってこず、ゲーテの卑小な俗物的な方面だけが映つた。グリュンはそれらを寄せ集めて「人間らしい人間」ゲーテの像をつくりあげて感激したのである。エンゲルスはいう、「ゲーテは、ある朝、自分の腕のなかにグリュン氏を發見した。グリュン氏の辯護、ゲーテの俗物的な文句のすべてにたいしてゲーテにどもりどもりささげるところの暖かい感謝、これこそ、侮辱された歴史が、この最大のドイツ詩人にくだした、もつとも手痛い復讐である。」なお、エンゲルスからの引用はすべて、「マルクス・エンゲルス文學・藝術論」(大月書店)によつた。

つぎに、この際一顧を興えておきたいのは、「世界市民」としてのゲーテの思惟や作品が、歴史的制約によつて、必然的にしゝい込んでいた抽象性である。そこでは「全人類」が階級を超越して問題となる。エフ・シルレルはその「ゲーテ論」(黒田辰男譯「ゲーテ論攷」九四頁)で次のようにいう。「ゲーテの創作した時代は、若いアルジョアジが全人類の利害と自己の利害とを一致せしめ、生産の資本主義的手段の支配のための自己の闘争を、全人類の闘争であるとし、この生産手段を永遠のものなりと考へた時代である。かゝる「普遍性」「全人類性」は——當時の「市民」の思惟の典型的な方法であつた。當時の時代においては、未だ人民大衆が市民と共に封建主義に對して戦つており、そしてそれが、ゲーテに、彼の藝術方法(「古典主義」)が、あらゆる藝

術創作の普遍的な、最高の唯一の方法であると云う錯覺をおこさせる基礎となつたのである。」しかし、ここに言われている「普遍性」「全人類性」とヘルマンやドロテアの「人間」としての理想化とは、おのずから別問題であることは特に指摘しておかなければならない。

しからば、なぜゲーテは、本質には忠實でありながら、虚偽の外面を描くことになつたのだろうか。特殊としてのヘルマンやドロテアの代りに、自己の創作方法から逸脱して、一般化された「人間」を強調するようなことをしたのだろうか。その秘密は、この一篇の最後にヘルマンが語る次の言葉から最も明瞭に察知できると思う。

……そのとき花婿は、けだかく、おおしい感動をもつて語るよう、「世間全體が動揺している今日、二人のちぎりを一層かたくしようね、ドロテア。一緒に持ちこたえ、たえ通してお互の心も立派な財産もしつかりと守って行こう。動揺する時代に、心まで動揺するものは、禍を増し、ますます擴げるばかりだ。それに引きかえ、志を堅く持つものは、自分の世界を造る。恐ろしい動揺を助長し、あちらこちらによるめくのは、ドイツ人たるものにふさわしからぬことだ。『これこそ我らの道だ。』そういい、そう主張しよう。神と掟のため、両親と妻子のため、戦い、共に敵にあたつて倒れた果敢な國民は常にたゞえられるのだから。お前はわたしのものだ。これでわたしのものはいつよりも一層わたしのものとなつた。それを守り用いるにも、悲しみ憂いながらではなく、勇氣と力をもつてやろう。……………」

ここでゲーテは「壮大な」言葉づかいで、しかも小市民的な内容をもり込みながら——この二つの矛盾した事柄を

讀者に抵抗を起させずに納得させながら——作者の意見を（そして小市民的な結論を）述べているのだ。農民の息子が語るこの調べの高い言葉をわれわれがなにげなしにうけとつてしまふように、作者は要心ぶかく、その直前にはドロテアをして最初の婚約者について同じく調子の高い——前に一部を引用した——回想を語らせている。そればかりではない、この全篇を通じてヘルマンとドロテアに興えられた外面的理想化とその徳性の美化・強調とは、右に述べた矛盾——農村青年男女とその言葉の高い調子との——をできるかぎり讀者から隠してしまふためのものであり、そしてそれは、根本的には、小市民的思想内容を美化し強調する役割を果したのである。

しかし、小市民的思想がなぜかくまで美化強調されなければならなかつたのか。それもさきのヘルマンの言葉が明らかに示してくれている。「動搖する時代に、心まで動搖するものは、禍を増し、ますます擴げるばかりだ。それに引きかえ、志を堅く持つものは、自分の世界を造る。恐ろしい動搖を助長し、あちらこちらによろめくのは、ドイツ人たるものにふさわしからぬことだ。」ゲーテはすなわち、押しよせるフランス革命の波濤からドイツを擁護しようとする自己の觀念をヘルマンに語らせているのであるが、しかし、われわれがみる通り、それは、怒濤のような社会の潮流にたいしては、あまりにも觀念的・逃避的な態度であり、せいぜい一種の「つよがり」にすぎない。この際ヘルマンに小市民・農民としての細部の眞を興えたなら、讀者はむしろ滑稽に感じなければならぬだろう。ヘルマンの理想化の故に、この敘事詩はかろうじて外見上それをまぬがれているのである。しかしわれわれは、フランス革命の波濤と家庭や財産にしがみつく小市民ヘルマンと——この對立のうちに、あらしのように發展してゆくフランス社会とみじめなドイツの現實との對立をみるのである。そして、「もつとも偉大なドイツ人」ゲーテが、フランス革命のあらしを「克服」しようとして、ドイツ國のなかからこの力弱い小市民をとり出してこなければならなかつた事情のうち、この天才がはまり込んでおり、またこの天才を歪めてしまった泥沼のよううごきのとれない當時のドイツ

の状態がはつきりと映っている。

(1) ゲーテはその創作方法の根柢にあるものとして、詩人は主観的であってはいかならぬ、かれはみずからを表現するのではない、という主張を各所で述べているが、エフ・シルレルは、さきに述べた論文のなかで、バイロンとユーゴーとに關してゲーテがエックエルマンに語つた次の言葉を擧げてこれを稱揚している(五二頁)。(バイロンの戯曲「マリノ・ファルエロ」について)。「作中人物は、自分自身の状態を表現しつつ、自分自身で語り、かれらにはまったく詩人の主観的感情、思想および意見というものが無い、すべてこれが眞の藝術である。」(ユーゴーの「ノートルダム・ド・パリ」に關して)。「かれがひき出した、いわゆる作中人物は、全然生きた肉と血をもっている人間ではなくて、不幸なる木製の人形であり、その人形をかれは、思いついた儘に取扱ひ、又かれが思いついた効果にとつて必要な、あらゆる道化や濫面をかれらになさしめるのである。」このゲーテの根本主張に照らしてみても、ヘルマンの描きかたがかれの創作方法からの逸脱であることがわかる。

#### 四

ゲーテからマイヤーに宛てた手紙のさきに引用した部分の後半、「同時に、世界という舞臺の大きな動きと變化とを小さい鏡のなかから反射させようと企てた」ということが、この敘事詩でどのように實現されたかの一斑は、前章に述べたところから知られる。ゲーテはこの作品にフランス革命を映そうと企てたのである。すでに述べたように、ゲーテは「世界中で恐怖その極に達したこの事件の顛末を、なんとかして詩の上で克服しようとする努力」をしたと告白している。じじつかれの作品でフランス革命に關係のあるものは、一般に想像されるよりも多いのである。それらはかれの文学作品のうちで量の上からはかなりの比率を占めているといつてよい。すなわち、「ヘルマンとドロテア」(一七九七)のほかに、フランス王ルイ十六世の宮廷のスキャンダルを暴露しようとした戯曲「グロース」

「ヘルマンとドロテア」の問題点

コフタ」(一七九〇—九二)、ドイツに及ぼしたフランス革命の影響を戯畫化した一幕の喜劇「市民將軍」(一七九三)、革命および革命家にたいする諷刺が隨所にもられている敘事詩「孤ライネケ」(一七九四)、フランス革命の影響をうけて、ドイツのある伯爵領で起つた農民一揆を主題にした未完の戯曲「激昂せる人々」(一七九三—)等があり、また、未完の戯曲「オーベルキルヒの少女」(一七九三—四)、小説「ドイツ亡命者の会話」(一七九五)、戯曲「庶出の娘」(一八〇三)などもフランス革命に關係があるし、「ヴェニス短詩」(一七九〇)のなかにもフランス革命に關する數篇の詩が含まれている。

これらの作品のなかや、その他の場所におけるかれの言葉やにあらわれたゲーテのフランス革命にたいする態度は、いまいちいち立ち入つて論ずることはできないが、それはおよそ次の三つの時期を頂點として變化がみられるのである。第一の時期は、いうまでもなく、一七八九年の革命の勃發であり、第二は一七九二年のフランス王政廢止、恐怖政治のはじまる時期で、第三は一七九九年のナポレオンが新政府を組織して統領となつた時期である。(そして「ヘルマンとドロテア」は第二の時期と第三の時期の半ば、一七九六年に執筆された。)

フランス革命の勃發は——陸続きの隣國に起り、ヨーロッパの動向を根本的に一變させることになつたこの大變は、もちろんドイツを大きくゆすぶつたのである。殊に先驅的・市民的理念をいさながら封建制度の桎梏のもとになやみつづけていた思想家や文学者に與えたその衝撃ははなはだしかった。クロップシュトックも、ヘルダーも、ゲーテも、シラーも、——カントも、シェリングも、フィヒテも、ヘーゲルも、いちように、抱きつづけてきた理想の實現として胸をたかならせてこれを迎えたのである。ヘーゲルの「歴史哲学」のなかの廣く知られた言葉が、これらの人々の感激をよくつたえている。「これこそは輝かしい日の出であつた。すべての思惟するものは、この時期をともに祝つた。まるで神的なものと現世とがいまはじめて和解へと到達したかのように、ある崇高な感激が當時の人

々のあいだにみなぎり、ある熱狂した精神が世界をゆりうごかした。」

(I) だがフランス革命のドイツにたいする影響はもちろん各階層一樣にいうわけではなかった。ガストン・ゼルレ「獨佛關係一千年史」(本田喜代治譯)にいう。「フランス革命初期に於ける諸々の出來事の反響は、ドイツでは、社會のどの階級にも同一というわけではなかった。そこで、封建ドイツつまり公伯諸侯のドイツと、一般民衆のドイツを、區別するのが便宜である。封建ドイツにとっては革命は直ちに一つの憎惡の對象だったが、一般民衆のドイツでは、すぐ西どなりの國で、今回十分一税や賦役が廢されたという知らせが、羨望の念を以て迎えられる。しかし、革命の味方と敵が衝突する機會は、出版物の論戰以外にはなかった。あんなに長くドイツ民衆を特徴づけて來た政治的忍従のお蔭で醜態が危険なふうに擴大することが妨げられた。かなり後に、サクソニヤとそれからシレシヤに、農民暴動が幾つかあったが、深刻な運動は一つもなかった。」ゼルレは續けて、「その大部分が哲學者達(十八世紀のフランスの進歩的思想家たち、ヴォルテール、ルソー、デイドロなど)の弟子であつたドイツ精神の巨匠達は革命がその初期に誕生させた遠大な希望に喜んで敬意を表した。」<sup>(1)</sup>といつて、ドイツの哲學者や文學者の感激を説明している。

だが、すでに述べたように、フランスとドイツというこの陸続きの國々の間には、國情の上で、その發展の段階において、大きな落差が生じてしまつていた。したがつて、ドイツの人々の「殆んど總ては革命を現實的に見ず、それがフランスの腐敗した封建制度を打ち倒すものであることを理解しなかつた。フランスでは革命によつて市民階級の社会的政治的の解放が實現されていた時、ドイツでは人間の權利についての觀念的な理論が重大なものとして取り扱われていた。經濟的社会的に後れていたドイツの人々にこの革命の歴史的意義は理解されず、彼等にとつてそれは現實から遠く離れた觀念的現象のように思われた。しかも彼等は熱狂し歡呼したのである。」<sup>(1)</sup>この觀念と現實との違いは、革命が恐怖時代にまで進展するにおよんで決定的となつた。ヘルダーその他少數の人々を除いて、「今までフランス革命に感激しこれを讚美したドイツの文學者思想家の多くは、このギロチンの流す血についての報道に接して戦

慄し、革命に對する態度を變更し、今やこれを憎惡しこれに敵意を示しさえしたのである。<sup>(2)</sup>」そしてこれが、ゲーテにあつても、フランス革命にたいする第二期の態度となつたのである。そこで注目すべきは、さきに述べたゲーテのフランス革命に關する諸作品が、ほとんどすべてこの時期に書かれていることである。かれが「なんとかして詩の上で克服」しようとしたのは、主としてこの時期のフランス革命であることが想像され、またじじつ、作品そのものがそれを證據だてている。

(1)・(2) 民科藝術部編「綜合ゲーテ研究」(昭和二十四年、北隆館)に含まれている舟木重信「ゲーテとフランス革命」を參照。なお、この論文では客觀的にゲーテとフランス革命の關係が語られており、要點はおおむね採り上げてあるので概觀するのに便である。また、同書中の他の論文、くりはら・ゆう「ゲーテの時代」においても、フランス革命時代のドイツとドイツ思想家に關する眼にみえるような敘述が行われている。

しかし、一般的にいえば、ゲーテは、全體としてのフランス革命にたいしては、ドイツにおける當時のどの思想家にも劣らぬ達見を示している。そのことは、フランス革命にたいするかれの態度の第三の時期に最もよくあらわれる。「テルミドル九日の變」によつて、穩健な市民階級が權力を握り、さらにナポレオンが支配についた頃には、フランス革命はかれの内部においてもある安定した位置に落ちつくのである。かれは革命が「恵みある結果」をもたらしたことを理解する。かれはまた、ナポレオンのドイツ改革の革命的意義を理解し是認する。そしてひとたび革命の味方となつたかれは、一八一三年——一五年の反ナポレオンの「解放戦争」、反動的な「愛國的祖國的戦争」にたいしても否定的な態度をとつたのである。<sup>(1)</sup>

(1) 一般にフランス革命とゲーテとの關係についても然りであるが、とくにその第三の時期に關しては、「ヘルマンとドロテー

ア」についてのこの小論では、立ち入って論ずることはできない。それはただ世界市民としてのゲーテの歴史的炯眼を指摘しうれば足りるのである。この意味で、いまは、エフ・シルレルが前掲書のなかで、エンゲルスを引用しつつ述べている次の言葉（六九頁）を掲げるだけで満足したい。「——エンゲルスは書いてある——『……ナポレオンはドイツにたいしては、かれの敵たちが確言しているような無限の暴君ではなかった。ナポレオンはドイツにおいては、革命の代表者、その原則の宣傳者であり、古い封建社會の破壊者であった。……フランスにおいてその仕事をなし遂げた恐怖政治の制度を、ナポレオンは、他の諸國には戦争という形式で適用した、そしてドイツにおいてこの「恐怖政治の制度」はきわめて必要であったのである。』『征服者』ナポレオンのこのすべての歴史的意義を、ゲーテやヘーゲルのような、ドイツ市民階級の洞察力のある炯眼の士たちは理解していた。というわけは、かれらは、たとえ俗物主義からは訣別することがけっして出来なかつたとはいへ、やはり——エンゲルスが云うように——一八一二、三年頃の『偉大な思想や社會的興味については何一つ知ろうと欲しなかつた』ところの『愛國主義的なドイツ小賣商人たちの慷慨』よりは、ずっと高いところに立っていたからである。」

いま、フランス革命にたいするゲーテの態度を三つの時期に段階づけてみたのであるが、もちろん、それは機械的に劃然と區別されているわけではない。第一の時期の純粹な感動はずつと後にいたるまでも持續しているのであり、またそれがなければ第三の時期の歴史的洞察が生じてくるわけもないのである。しかし、ほとんどすべてが第二の時期に書かれた文学作品のなかでは、さすがのゲーテにもこの大事變の見透しがつかず、いたるところで革命にたいする態度の動搖がみられる。「ヘルマンとドロテア」のなかでは、フランス革命の理想への感激と恐怖政治時代におけるそれへの幻滅とが、革命軍からの避難民の老指導者の口を通じて、最も明白に表現されている。

……新しい太陽の曙の光りがさし昇つて、萬人共通の人権とか、心を奮い立たせる自由とか、稱うべき平等とかの聲をきいた時、心は高まり、のびのびとした胸に清い血の脈搏つたのを、誰か否むものがありましよう。そ

の頃は人みなが自分を生かす生活が出来ると思いました。遊惰と私慾のともがらが手に握つて、多くの國をからめていた絆が解けそうに見えました。……………

……………婚約の男女が、あこがれの婚禮の日を待ち望みながら心も空に踊る時、その楽しさはどんなでしょう。しかし、凡そ人間の考える最高の理想が間近に達せられそうになつた時は、それにも増して素敵でした。それこそみんなの舌がほぐれ、老人も大人も若者も高尚な精神と感情を胸一杯にたたえ、聲高く話合うのでした。

だが間もなく空が曇りました。善事を創り出すことなど柄にもない墮落したやからが支配權を争い、互に殺し合い、新しい隣人や同胞を押しつけ、私慾の張つた連中を派遣しました。……………

……………ああも淺間しく血迷つた人間を二度と見たくないものです。たけり狂うけどものを見る方がまだましです。自ら治めることが出来そうな顔をして自由を云々することなんぞせぬことです。一度せきとめるものがないとなると、法律の力で隅つこに追いこめられていた悪業が躍り出してくるものです。

だが、ここに留意しなければならぬことは、革命にたいする感激も幻滅も、この敘事詩にあらわれたかぎりにおいては、あくまで観念的な言葉の上での表現にすぎないことである。さきに挙げたドロテアの言葉のなかにも、革命に殉じた「氣高い」かの女の婚約者と革命の理想との讚美がみられたのであつたが、これも観念であつたことに變りはない。また「善事を創り出すことなど柄にもない墮落したやから」のことにしても、それは老人の口を通じての説明にすぎない。さらに留意しなければならぬことは、總じてゲーテは、この作品のみならず他の作品においても、フランス革命の理想の體現者も、一墮落したやから」も、具體的に如實にこれを描きだした例は一つもないこと

である。それらの人物はゲーテの體驗に入ってきたことがなく、かれらの同志たるべきものは、ゲーテの本國では、ほんの少數の人々を除いて、まだ長い封建的な眠りにおちいつていたのである。ゲーテは、かれらについては誇張されたゆがんだ報道にたよつて認識するほかはなかつた。「眼の人間」ゲーテにとつては、そこに致命的なものがあつたのである。そういうわけで「市民將軍」でジャコバン黨員を戯畫化しようとしたときも、これをコソ泥の姿でしか具象化し得なかつたのである。

「ヘルマンとドロテア」のなかで具體的な行動となつて描かれているフランス革命とは、一七九四年の八月頃、七月廿七日の「テルミドル九日の變」と時を同じくする——と推定される時期の、フランス軍から逃れてくるライン左岸のドイツ人たちの避難民の行列であり、その混雜である。行列は丘から丘へはてしなく續いていて、谷を横切る道では歩く人や車の押しあいへしあいが一段とひどくなる。押しつぶされる女子供が泣きわめくかと思うと、牛馬がなき、犬もしきりに吠えたりする。こぼれ落ちそうになるほど荷物を積んだ車の上の寢床に、ゆれている年寄や病人や産婦のうめき聲、等々。そしてそれが、——暑い日の空には雲ひとつなく、死に絶えたように人影もない、ハエの飛ぶ羽音さえも聞えそうな静けさと、「全世界が天國の平和の中にひたつていようように甘美な心地よさ（ビルシヨウスキー）」とに對照されているのである。それはまた、小さいながら住む人も多く、工場もかすかすあり、いろいろな商賣も營まれているという町、みのり豊かな谷間と曲りくねつた狭間の平和な片田舎、ぶどうを主として種々の果實や野菜も豊富、麥もたわわに實つているところ、河や山岳が一幅の繪のように美しい地域——それに對照されているのである。

われわれは、もちろん、この時期のフランス革命の歴史的段階について、同時に當時のドイツの實情について、ここに論議をするつもりはない。しかし全體としてのフランス革命の意義にたいするゲーテの洞察と、かれのすぐれた

諸作品に表現された（かれが反逆し嘲笑した）當時のドイツにたいするかれの認識と、——それらに對比してみる  
 とき、この敘事詩にあらわれたかぎり、（主要人物の理想化<sup>II</sup>歪曲<sup>II</sup>においてのように）情勢と環境とについても眞實  
 の歪曲が行われ、ゲーテの藝術家としてのまなこがくもらされていることを知るのである。すなわちかれは、ヘルマ  
 ンやドロテアを極度にまで理想化する一方、他方においては、フランス革命という大きな情勢を、ライン河畔にお  
 けるドイツ避難民のおしあいへしあいという形にまで縮少<sup>II</sup>歪曲<sup>II</sup>して描寫し、同時に「すべてがすりへつて、ぼろぼ  
 ろになり、ほろびかかっていた」<sup>(1)</sup>當時のみじめなドイツを隠蔽<sup>II</sup>歪曲<sup>II</sup>し、これを一つの「平和な」理想郷として讚美  
 したのである。

(1) 「ドイツの状態」でエンゲルスはいう。「前世紀（十八世紀）末ごろのドイツの状態は以上のようなものであった。それ  
 は、すみずみまで完全に、腐敗といまわしい墮落との生きたかたまりであった。だれも安心していられるものはなかった。この國  
 の手職、商業、工業および農業は、ほとんど無に歸していた。農民や商人や製造業者は、吸血鬼のような政府と不景氣との二重の  
 壓迫をうけていた。貴族と王侯は、その臣民の膏血をしぼっていたにもかかわらず、増大する支出に彼らの収入の歩調を合せるこ  
 とができなかった。万事がよろしくなかった。そして全般的な不安が國中にみなぎっていた。教育がなく、人心を動かす有効な手  
 段がなく、出版の自由がなく、公共精神がなく、他國との廣範な通商さえなく——あったのは卑しさと利己心ばかりだ——卑し  
 い、ずるい、あさましい小商人根性が、全民間にひろまっていた。すべてがすりへつて、ぼろぼろになって、ほろびかかっ  
 いた。そして好轉の望みはみじんもなく、死んだ諸制度の腐りきった屍体を運びさる力さえ國民にはなかった。」

われわれはそこでまた、なぜすべてをみぬく天才、ゲーテが、このように革命の眞の姿を歪曲し、みじめなドイツを  
 讚美するようになったのかを問わなければならぬ。前章で、われわれは、ゲーテがヘルマンの口を通じてドイツ擁  
 護をよびかけているのを知った。そして、擁護さるべきドイツは平和で美しくなければならなかったのである。一つ

の歪曲は他の歪曲をひきおこす。フランス革命は、正當に描かれれば、小市民的環境とともに、ヘルマンやドロテアを呑込んでしまうほどの大きな情勢である。この敘事詩の人物——小市民をしてこの情勢を「克服」せしめるためには、それは縮少し緩和されなければならない。かくてはじめてこの敘事詩は平衡を保ち、詩的な「美」の外観を得たのである。

しからばなぜゲーテは、自己の創作方法からのあらゆる逸脱をしてまで、フランス革命を「克服」しドイツを擁護したい要求をもつたのであろうか。それは、根本においては、さきに述べたゲーテのフランス革命にたいする第二期の態度——理解しがたい情勢への恐怖にその根源をもとめねばならない。エンゲルスは恐怖政治にたいするゲーテの「判決」として、かれの次の言葉をあげた、「多數者ほどうべきものはない。なぜなら、それは、少數の強い先導者と、付和雷同の悪黨と、大勢順應の弱者と、自分の欲するところを知らないくせに他人の尻馬にのる群集とからなりたっているからである。」そしてかくの如きがまさに「ヴィマル公の顧問官」ゲーテのフランス「大衆」にたいする認識であつたのだが、エンゲルスはこれを説明して、「こういう無知短見は、ドイツの渺たる一小國の、ごく狭くらしい地盤においてのみ可能なのだ」といつた。ゲーテの歴史的爛眼と藝術的天才とは、ドイツのみじめさに、そしてこのみじめさの故にこそ生れてきた「正眞の素町人的判断」にうち敗かされたのである。